

# ら・かんぱねら NEWS Episode 0.5(表)

La Campanella News

Episode 0.5



## 映画のたまご（オールラッシュ）

東京調布市の角川大映スタジオに着いた3人は、久しぶりに再会する映画スタッフの熱烈な歓迎に、少し照れくさい仕草を見せた。

一応の挨拶を済ませた後、スタジオ地下にある試写室に案内された。3人とは、映画「ら・かんぱねら」を支援する会のBOSS川崎賢朗・事務長川原常宏・デスク鐘ヶ江留美子で、支援する会が発足前から準備を進め、苦労を重ね映画製作に多大な貢献をした人たちです。

「3人がいなからたら映画製作は無い」とも言われている。お礼を込めて誰よりも早く「オール・ラッシュはまず、3人に見て貰って」感動を支援する会のメンバーに伝えてほしいとの配慮から行わられたものです。



製作の鈴村代表、鈴木監督と角川スタジオにて

【BOSS】監督からの誘いでオールラッシュ！映画のたまごを観てきました。佐賀を出発する時は楽しみ半分、不安半分が正直な気持ちでしたが、試写会はロケで仲良くなったスタッフがいて懐かしい中で始まりました。試写会が始まっていますぐに不安は解消し、音楽や効果音が加えられた完成作を早く大きなスクリーンで観たくなりました。

【事務長】台本を読み何度も涙させられたが、オールラッシュを観て、ロケの準備、撮影、炊き出しなど、これまでみんなでやってきたことを想い出し思わず涙が込み上げてきました。

【デスク】「ら・かんぱねら」一足先に観てきました。伊原さんが奏でる「ラ・カンパネラ」を是非スクリーンで聴いて欲しいです！皆さんご期待ください！感動をお届けします！



佐賀市川副町小々森の旧田中邸に、映画「ら・かんぱねら」の主役が住む徳田邸のセットが作られた。美術・装飾のプロデューサー達が本気で素晴らしいセットに仕上げた。台所を覗くと食事シーンのための料理が盛り付けられていた。その中心に居るのが川原麻子さん。支援する会の川原常宏事務長の奥様で、通称「麻ママ」。人気者で事務局を切り盛りしているひとりです。何を隠そう「麻ママ」こそが、この映画を決意させた真の「立役者」なんです。鈴木監督が三年に渡って通い、海苔師のピアニスト徳永義昭さんをモデルにした映画づくりを訴え続けたが、中々いい返事を出さないBOSS。そんな時に普段は穏やかな麻ママが「なんばグジグジしよっとね！」と喝！この一言でBOSSの不安を払拭させ、頑張ろうと決意した。その後、順調に進み映画「ら・かんぱねら」を支援する会が発足し、現在に至ったという逸話があります！

先行ロードショー

2025.1.31 (金) イオンシネマ佐賀大和

2025.2.21 (金) イオンシネマ福岡・筑紫野・大野城・戸畠・熊本



# ら・かんぱねら NEWS Episode 0.5(裏)

La Campanella News *Episode 0.5*



的確に指示を出す佐々木成人君!



## 文太さん、出番ですよ!

「文太さん寝ている場合ではないですよ」と声を掛けられても気づかず、トラックの運転席で爆睡する吉田信さん、愛称は文太さんで支援する会の人気者です。Facebookでも一番星桃次郎で登録するほど俳優の菅原文太さんが大好きで、直接会いに行つた事は有名な話です。話題は尽きない伝説の持ち主の文太さん！自称トラック野郎を名乗っています。爆睡するには訳があります。この日も早朝4時からのロケが始まるため、早起きして撮影機材などを運ぶ車両担当のボランティアで、昼の食事を済ませポカポカと気候も良くなり睡魔が文太さんを襲ったものです。お疲れ様ですと労いたい気持ちです。でも、この時だけ静かです。直ぐにいつものパフォーマンスが始まります。「監督、いいですよ。やります！」と監督だけでなく・助監督・プロデューサーにも売り込みに全霊を尽くします。現場では笑いもありますが、独特な対応にはエキストラのスターとスタッフをも感心させました。映画「ら・かんぱねら」どのシーンに文太さんが出るか、楽しみながら鑑賞して頂ければ幸いです。



監督の側にピッタリ



サイン収集の結果



予定表を熟知する



川崎瑠奈さんと一緒に



エキストラ成功でピース



## ボランティアスタッフの真心のおもてなし

俳優さんも映画スタッフも大満足のおもてなし！延べ100名を超える炊き出し隊では、支援する会のスタッフに加え、南川副・早津江・大詫間・広江・諸富などJF有明海漁協女性部の皆様が、海苔スープ、豚汁、しし汁、玉ねぎスープなどの汁ものから、シシリアンライスや豚丼、カレー、おでんなど、それぞれ思考を凝らしたお料理でおもてなしを行いました。炊き出し風景は、主演の伊原剛志さんのinstagramで動画配信して頂いております。



発行者： 映画「ら・かんぱねら」を支援する会

佐賀県佐賀市南佐賀2丁目6-3 TEL 0952-97-4781 mail:info@la-campanella.net

# 親愛なる友に捧ぐ

## ～内田俊彦アドバイザーを偲んで～

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

BOSS 川崎 賢朗

去る7月30日にお亡くなりになられた内田俊彦さんと共に志をひとつに映画「ら・かんぱねら」を支えたメンバーとして、心から哀悼の意を表します。

俊彦さんは、60歳の退職まで漁協の職員として勤められ、常識者で知見、見識を合い適えた方で私をはじめ大勢の人に心のこもったアドバイスをする等、絶大なる信頼の持ち主でした。また、趣味も多彩で釣り用ボート、カラオケ、素潜り、バイクツーリングと多く華やかでした。特にバイクは複数台有する程で、40年近く続くツーリングクラブの会長を務めて頂きバイクの楽しさを教えてくれた人でした。

俊彦さんを映画「ら・かんぱねら」の支援する会のスタッフに誘ったのは私でした。経験豊富な知識を生かして貰おうとお願いした所、支援する会の発会前から規約、定款作りに尽力を頂き、支援する会のアドバイザーとして活躍されました。その他、車両班として、映画の準備が進む中、マイクロバスを運転し福岡空港まで製作スタッフを出迎える。口ケ中は、早朝から深夜に至るまで送迎に努め、独特な口調で話し掛けて疲れているスタッフの気持ちを和らげて感謝されていました。

また、PR隊としても映画のモデルになった徳永義昭さんのピアノコンサートなどでは、チラシを配ったり協賛金をお願いしたりと支援の輪を広める活動をされていました。

支援する会のために一生懸命行動され、充実した日々を送っていた姿が今でも目に浮かびます。俊彦さん、念願だったスタッフ一同が揃った特別披露試写会を観る事は叶いませんが、一番良い席を用意しますので一緒に楽しみましょうね。 合掌



(内田さんの娘・遼子さん)

「ら・かんぱねら」の完成おめでとうございます。この作品は、佐賀の魅力で溢れていて、中でも海苔養殖については非常に詳しく描かれ、今年度から海苔に関連する仕事に就いた私にとって非常に勉強になりました。父は、支援する会のメンバーとして映画に関わらせて頂いていましたが、支援する会の活動をはじめてからはより一層生き生きとしており、この活動が父の「生きがい」となっていました。「今日もかんぱねらに行くけん」と楽しそうに準備をしている様子は今でも覚えています。

完成した作品をみんなと一緒に観る事が叶わず、非常に悔やんでいる事だと思います。クセの強い父を温かく迎え入れ、優しく接して頂いた支援する会のみなさまに感謝致します。ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

(内田俊彦さん)

# 上司は天国の映画館で観賞してます

～原征治さんを偲んで～

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

支援チーム 古川 彩華



この度は、映画「ら・かんぱねら」の完成おめでとうございます。

私はSNSでの情報発信の担当として支援する会に参加させていただきました。仕事の都合によりあまりお力添えできませんでしたが、仕事先である障がい者支援施設での缶バッジを製作したことにより障害者の人達も社会貢献できた喜びの一つになったのではないかと思います。

この作品には、佐賀市内の浪漫座やレトロ館、それに有明海での海苔養殖など撮影された箇所に佐賀県の魅力が溢れています。一緒に活動していた前職の上司である原征治さんと完成した映画を観れなかったのは、とても悔しい気持ちでいっぱいです。

原さんのことだから天国の映画館で「ら・かんぱねら」を観ながら、主演の伊原さんをかつこいいとか、南さん美人とか呟いていそうです！ひとりで試写会にいきましたが、いろんな方が私に声をかけてくださいました。

支援する会の素敵なスタッフのみなさんと関われる機会を与えてくださったことに感謝いたします。益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

# 全15段(1面)広告 佐賀新聞 2025.1.26

(第三種郵便物認可)

佐賀新聞

2025年(令和7年)1月26日(日曜日)

【広告】

12

CAST



伊原剛志

南果歩

大空眞弓

不破万作

緒形敦



枝元萌

田中がん

鹿毛喜季

川崎瑠奈

江口直人・森慎太郎(どぶろっく)

## 夢を応援した、たくさんの仲間たち!



発会式の集合写真

第一回実行委員会

事務局の仲間たち

オーディション打上げ

映画クランクイン



クランクインでの鈴木監督のあいさつ

ピアノ小屋での録音

嘉瀬川ダムでの植林風景

佐賀城公園にて

おもてなし隊のみんな



映画クランクアップ

映画製作スタッフ集合

浪漫座での集合写真

海童神社での祈願祭

試写会スタッフ

映画のモデルとなった徳永さんご夫婦  
(試写会でのあいさつ)

伊原剛志

南果歩

不破万作

緒形敦

枝元萌

田中がん

鹿毛喜季

川崎瑠奈

江口直人・森慎太郎(どぶろっく)

大空眞弓

夢を弾く  
届けたい、  
こころの音色を



ら・かんぱねら  
いよいよ 1/31(金)  
イオンシネマ佐賀大和で公開開始!  
この曲を弾きたい!  
52歳の本気の挑戦がはじまる

県内ロケ、  
佐賀県民も  
多数出演!

九州・佐賀の有明海で海苔漁師として生きてきた男が、  
ある日、フランツ・リストの名曲「ラ・カンパネラ」を聴いて感動。  
自ら弾いてみたいと、周囲の反対を押し切り猛練習を重ねる。  
プロのピアニストもひるむほどの難曲に、52歳の男の本気の挑戦がはじまる——。

監督・企画 鈴木一美

製作 鈴村高正 鈴木一美 プロデューサー 鈴木一美 川口浩史 モデル 徳永義昭 徳永千恵子  
脚本 沢澤美恵子 鈴木一美 音楽 坂田明 有木竜郎 プログラミングマネージャー 桑山和之 撮影 丸池鈴 照明 山川英明 美術 黒瀧みみえ  
監督 丸山龍 製作 清水謙一郎 編集 村上雅樹 広報宣伝プロデューサー 桑山和之 北村和秀 記者会見 ヨチ・プラン・ピクチャーズ  
製作協力 映画「ら・かんぱねら」を支援する会 製作 京映アーツ／コチ・プラン・ピクチャーズ  
特別協力 佐賀県 佐賀市

協賛 JFE佐賀県有明海漁業協同組合／佐賀県立佐賀東高等学校 不知火同窓会／株式会社サン海苔／戸上グループ／久光製薬株式会社

C2025「ら・かんぱねら」製作委員会(京映アーツ／コチ・プラン・ピクチャーズ)

特別協力 佐賀県 佐賀市

協賛 JFE佐賀県有明海漁業協同組合／佐賀県立佐賀東高等学校 不知火同窓会／株式会社サン海苔／戸上グループ／久光製薬株式会社

C2025「

# みんなに出逢えて良かった

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

デスク 鐘ヶ江 留美子

2022年初夏 佐賀東高敷地内にある不知火同窓会事務局のドアがノックされ「どうぞ～」のかけ声と共に3人の男性が入ってくる。あ、徳永さんだ… 私が“映画ら・かんぱねら”と縁が繋がった瞬間でした。

「今度、徳永義昭さんをモデルにした映画を作る事になったんだよ」と鈴木一美監督。「同窓会さんにもお世話になると思います」と川口浩史プロデューサー。へえ～映画作るんだ～。この時戴いた「極秘」の印が押された台本を読む事なく一年放置した私は、2023年6月、一度の熟読で同窓会の事務局を兼ねてデスクを受ける覚悟をするのでした。

まだ事務所もない、パンフレットもない、ポスターもない、もちろん名刺もない。ないないづくしの中で「極秘」の台本一冊を手に、毎日毎日支援する会を立ち上げる準備に奔走するBOSS(川崎賢朗さん)と常さん(川原常宏さん)それに監督。協賛用の口座や郵便振替用紙を作るのにどれだけの時間を割いたんだろう…。規約も作らなきや、発会式には何が必要?メディアはどうする?手探りの状態から始まった、これが支援する会のスタートでした。これが一年後とんでもない会へと変貌を遂げます。協賛金集め、オーディション、炊き出し、試写会。スタッフみんなの結束力は凄いものがありました。どんなに大変でも常に笑顔で場の雰囲気を明るくしてくれます。いつも私達を助けてくれました。

監督、第二の人生への大きな一歩となりました。声を掛けていただきありがとうございました!BOSS、時にお互いの意見がぶつかる事もありましたね。でもBOSSだったからついて行けました。常さん、どこに持つていって良いか分からない気持ちを何度も聞いて貰った事か。あの時の涙は忘れません。そしてスタッフのみんな。みんなが居なければこの映画をここまで盛り上げることは出来ませんでした。感謝の気持ちでいっぱいです。映画「ら・かんぱねら」と「みんな」は私の財産です!みんなに出逢えて良かった!本当に本当にありがとう!

最後に一步を踏み出せずにいた私の背中を押してくれた子供たち、これからもよろしく。内田さん、原さん、天国からみんなの姿見えてますか。



# 映画に携わってくださった皆様に感謝

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

事務長 川原 常宏

先ずは、この映画に関わって頂いた皆様に心より感謝を申し上げます。エンドロールに流れるお名前その他にも、本当に多くの方々、おひとりお一人のご支援やご協力が、この映画を完成に導いて頂けたものと思っております。

映画をつくりたいという鈴木監督の想いが、ほんの小さな火種となり、ここまで広がり盛り上がったのは、陣内会長率いる映画「ら・かんぱねら」を支援する会の役員の皆様、そして、仕事の傍ら支援する会の縁の下を支えてくれたスタッフのみんなのお陰です。

この支援する会を立ち上げるにあたり、陣内会長や西久保副会長が、やろうと！という決断をして頂けなかったら、この映画は動いていなかつたと思います。また、佐賀の映画を創るために力を貸して頂いた理事の皆様がいなかつたら、この映画は…。

私自身もそうですが、みんなが初めての経験という中で、何をどうやればいいのかも分からず手探りでの事務局運営となりました。完成まで幾多の壁があり、それをみんなでひとつひとつ乗り越えてきました。本当に大きな壁を！その壁を乗り越える度に、スタッフの結束力が強まり、それぞれの心に自分たちの映画を創るという「夢」が芽生えてきたのではないかと思います。

主演の伊原剛志さんや南果歩さん、そして不破さんからも「この映画は皆さんの映画ですよ！」と言って頂いた事は、みんなの心のこもった撮影サポートやその結束を感じて頂けたからではないかと思います。

私自身もこの「夢」を成し遂げるために、走り続けてきました。みんながいてくれたから、走り続けられたし、みんながいてくれたからこの「夢」を叶えることができました。そして、みんなでみんなの「夢」を叶えることができ、映画が無事に生まれました。

この映画をひとりでも多くの皆さんに観ていただける事を願い、この映画「ら・かんぱねら」に携わって頂いた全ての皆様に心より感謝申し上げます。私たちに「夢」を持つきっかけをつくってくれた鈴木監督、ありがとうございます！

最後に、この映画のモデルとなった徳永義昭さんと奥様に、敬意と心からの感謝を申し上げます。



# スタッフのみなさん、お疲れ様でした

映画「ら・かんぱねら」を支援する会

事務局長 川崎 賢朗

振り返れば2023年春、川原常宏くんと鐘ヶ江留美子さんと私の3人からのスタートでした。

夏頃には少しずつ集まり始め10月の支援する会立ち上げの時には、組織図が出来上がりました。2024年に入ると本格的に協賛金集めに没頭し、2月に入ると連日徹夜状態でのエキストラオーディション募集の作業。終わったと思ったら2日間のオーディションに対するクレーム処理、3月に入りクランクインするとロケのお手伝い、車の手配や運転、炊き出しと沢山の人に頑張って頂きました。

そして夏を迎える頃には映画のPR活動が本格化し始めました。秋になると特別披露試写会のチケット発送、会場下見や配置の確認、本番と振り返ればあっという間の濃ゆ過ぎる2024年でしたね。

今年2025年に入り1月31日一般公開の時も3日間満席プロジェクトを立ち上げ、ヘトヘトになりながらみんなの力で3日間満席にする事が出来ました。そんな時、いつも疲れを吹き飛ばしてくれたのは笑顔で迎えてくれるスタッフルームがあったからだと思います。沢山の皆さんに絶大なるご協力を頂き数々のミッションをクリアさせてきました。

スタッフの皆さん本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。



# おわりに

事務局長 川崎 賢朗

皆さん覚えていますか？

一昨年の支援する会の発会式が終わり、マスコミ取材の時のことです。女性の記者さんからの質問の中に、この映画の作り方は「佐賀モデル」ですねと尋ねられました。

その時は、協賛金を募って映画を作るやり方を言わっていました。そして支援する会も目標金額1億5千万円の協賛金を集め映画を作るのが、最大の課題であり使命だと思っていました。

しかし実際には協賛金集めは勿論ですが、出演者を決めるオーディションも県内外から凄い数の応募者があり、リストの登録、連絡、進行、それに伴う多くの問い合わせやクレームの処理まで、支援する会が前面に出て動いていました。ロケーションでもそうです。ロケ現場を作り上げるための大量の家具、生活用品の搬出から掃除等、その他にも食事をするテント、イス、場所の確保に至るまで、支援する会のネットワークを活かし、友人、知人、そして各種団体などから調達したのです。

また、ロケ中に至っても、車両の提供のみならず運転、映画に出てくる美味しいそうな料理、小物など、少ない製作スタッフをサポートしていました。支援する会のみならず、漁協の女性部の皆さんも協力をいただき、ロケ中の食事にも大いに喜んでもらいました。ロケ中のお弁当は冬の終わりとはいえ直ぐに冷たくなりました。そこで料理や温かい汁物を作り俳優さんや製作スタッフの胃袋を温かくし、やる気を起こさせたりモチベーション維持に一役かっていました。約1ヶ月間、みんなよく頑張ってくれました。

10月行った漁業者向けの特別試写会、一般向けの11月17日の完成披露試写会も支援する会が主体となって開催しました。完成披露試写会では、当日ポスターやチラシが使えないなどのトラブルを乗り越えて、大盛況に終える事が出来ました。

年が明け1月31日から、イオンシネマ佐賀大和で始まった一般公開での舞台挨拶や満席プロジェクト、館内整理のお手伝い。満席が続き館内の発券機には、毎日長蛇の列が出来ている状態が発生していた。そんな中、お客様に気持ちよく映画を観ていただきたい一心で、自主的に行動を起こし、お助け隊を結成して毎日早朝から笑顔でサポートを行ったスタッフたち。

このような行動が1館で2万人超えの奇跡を産み、全国へと繋がって行ったのです。こうして支援する会スタッフは困難を乗り越える度にスキルが上がり、自主性が出てきたのです。

最後に紹介しますが、宣伝配給スタッフにも頼もしいウチのスタッフが入っています。前職のスキル、人脈を最大限に活用して、舞台挨拶の段取り、司会はもとよりマスコミを使った映画の宣伝、映画館の掘り起こしなど、多岐に渡り今なお活躍を続けてくれています。

これが幾度となく困難を乗り越えて創りあげた真の「佐賀モデル」ではないでしょうか。

仕事を終えると、かじかんだ  
手をねるま湯につけては  
ピアノの鍵盤を叩いていた  
男のことを見は知つていて  
いる

映画「ら・かんぱねら」

監督 鈴木一美



編集委員会委員長  
副委員長  
編集長  
副編集長  
委員

写真提供

川崎 賢朗  
川原 常宏  
北村 和秀  
鐘ヶ江 留美子  
千住 友二 飯田 豊一  
藤田 佳典 進 智恵  
池田 史子 古賀 宏  
石隈 由紀子  
製作配給委員会



発行 映画「ら・かんばねら」を支援する会  
発行人 川崎 賢朗